

⑦ 「長崎高商物語」―野村邦光著（読売新聞・長崎支局）を読む

本書は昭和57年1月から58年12月まで、読売新聞、長崎・佐世保版に掲載された長崎高商の物語である。連載の動機は、当時「長崎高商」が「長崎大学経済学部」に転じて既に35年が過ぎており、何れ高商の歴史が学部の歴史に埋没してしまう恐れがあるので「長崎高商」独自の生きた歴史を書き残しておきたい」ということであった。プロによる読物だけに、本書は多彩な挿話に載せて、明治38年の開校から昭和26年最後の卒業生まで「長崎高商」約半世紀の事歴と人物像を面白く語る。以下本書の目次を辿れば、最初は福岡・佐賀・熊本との「誘致合戦」。続いて帝大出で厳格過ぎた初代校長の「追い出し事件」。「県経済界を指導」された脇山勘助氏と「異色の書家」小曾根均治氏。「校歌と校旗」に「柴崎校長事件」など。

「十八銀行の中の高商」では松田一三・西田正純・梅田昭郎の各氏に触れ、「異色教授伝」では武藤長蔵・浅野金兵衛教授・日本通のドルフ先生などを語る。「白球の青春」では医専・米艦隊・菓専との試合経過と野次・喧嘩騒動を語る。次に「市長のいす」では辻一三佐世保市長・諸谷義武長崎市長に相当のスペースを裂く。やがて戦乱が近づき「戦火の青春」では在学中に徴兵検査を受け、愛国貯金・勤労奉仕を強いられ、経済エリートとして南方へ駆り立てられた。そのような時世でも「長崎高商生と高女生」の悲恋心中事件が起きた。

昭和19年「長崎経専」「工業(経営)門学校」へ校名変更。「原子雲の下で」「廃墟の中で」では、学徒動員中での被爆・必死の搜索体験が綴られる。そして終戦。軍から高等商船から個性溢れる転入組を抱えて窓硝子は破れ、図書館の本は床に散乱の俎に授業が再開される。「不惑の齢」では進級する40・41回生の半数が落第、臨時学生大会を開き(落第反対)を決議。「インフレと空腹以外は何もなかった」昭和22年「長崎経専」単科大学昇格期成会の夢は破れ、長崎大学経済学部へ。昭和25年入学時には大村教養部ポイコット事件が起きた。

昭和30年母校創立50周年を祝う式典の後に続くのは、母校キャンパスの大橋移転反対運動である。同窓会を巻き込み全国から7万人の署名を集め、昭和40年移転案撤回となった。

さて本書は此処から後半の(1/3)を「瓊林山脈」の人物紹介に当てる。高商同窓会は明治42年設立され、現在は一万三千名の卒業生を擁するが、経済界・官庁・教育界・実業世界などで活躍された多彩な人物、数十名を28項目の小見出しを設けて卒業年次毎に紹介していく。曰く「造船日立を築く」松原与三松・永田敬生氏(以下敬称略)。「精洋亭にかける」の金子三郎。「語学抜群で通訳」の三瀬清次郎。「統計学の大家」塚原仁。「香料史研究」の山田憲太郎。「造船の街支える」中西七蔵。「原子野に文化の灯」俳句の松尾敦之、短歌の島内八郎氏など。今となって本書は、過ぎ去った高商の記憶を手早く知るのに、大変に貴重な本である(0417)

☆本書の周辺☆ 「長崎高商卒の偉い人の話ばかりでつまらないのでは…」と懸念する。ところが結構面白い。前半は特に。郷土と共に伝説の母校物語が数珠繋ぎになって楽しめる読物である。

